

いけにえ判の毒蛇 (1)

今から四百年位前の、天正のころのある日
のことでした。

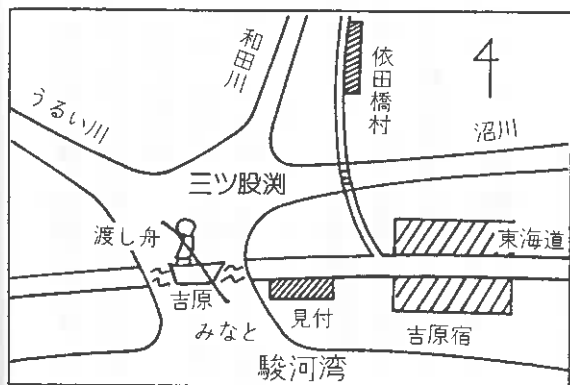
六月の日は強く、から梅雨の日照りが
三・四日つづいた東海道は、すこしの風でも
砂ほこりがまいあがっていました。

白い手甲ときやはんをつけ、わらじばきの
七人づれの巫女たちが、いかにも楽しそうに
笑いあつて、むし暑い東海道を西へ向つて歩
いていきました。

この巫女は、下総の国（千葉県）から修業
のために京都へ行く途中でした。

「うらいでひと休みしましょう」と通りかかっ
た毘沙門天前の茶屋のえん台に、腰をおろし
ほつとひと息いれました。

昭和五十五年五月五日号



ところが、なんとなくあたりがざわめいて
います。

巫女たちは茶屋のおかみさんに、「この吉
原宿で何かあるのですか」と聞いてみました。

三ツ股淵に大蛇が

するとおかみさんは、いかにも待つていま
したというような顔つきで話しました。

「この北側の三ツ股淵には何年も前から大
蛇が住んでいて、毎年六月二十八日の大祭日
に村人は、小舟につんだ三俵分のお赤飯を淵
のまん中に沈めて、大蛇の怒りを静める行事
をやります。

ところが、十二年に一度の巳の年には、若
い娘をいけにえにすることになっていまして、
もしそれをやらないと、大蛇は怒つてこの土

地に大難を与えるというのです。

そこで、いけにえになる娘をくじ引きで決
めているのです。」

その話しをきいた七人の巫女の顔色がさつ
と青ざめました。

いつそのこと沼津宿まで引きかえして、根
方街道から京都へ行くこうかと迷っていると、
突然入ってきた宿場役人に問屋場の前まで連
れていかれ、無理にくじを引かされました。

「神様、どうか当たりませぬように……」と心
に思いながらひとりひとり、くじを引きました。
ところが、七人目に引いた一番年下の、お
あじという巫女のくじには、赤い丸がついて
いました。おあじを囲んで七人はその場にど
つと泣きふしてしまいました。